

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

そして「触常者宣言」が生まれた

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4309

そして「触常者宣言」が生まれた

広瀬 浩二郎

時代が変わったなあ。これが「サワッテ ミル カイ」に関わってきた僕の率直な印象である。プログラムの具体的な内容や今日までの経緯については本報告書で詳しく紹介されているので、ここでは繰り返さない。僕は視覚障害当事者の立場でワークショップの準備、参加者集めなどに協力してきたが、大野先生をはじめとするスタッフの方々との交流は刺激的だった。僕自身が“さわる”体験型ワークショップを企画、実施する際のアドバイスも多数頂いた。新たな出会いを与えてくれた京大プロジェクトに心から感謝している。

さて僕が本稿で強調したいのは、一大学博物館が、これまでミュージアムから疎外されていた視覚障害者を対象とするイベントを継続的に開催したという事実である。おそらく、こういった取り組みは世界にも類例がないだろう。博物館と視覚障害者の関係についての詳細は拙編著『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム』（読書工房、2007年）に譲るが、「サワッテ ミル カイ」の大きな特徴は、目の見えない参加者たちの“さわる”力に着目した点だった。社会的弱者としての障害者に博物館を楽しむチャンスを与えるというバリアフリー的な発想ではなく、“さわる”ことを日常的に行なっている視覚障害者（＝触常者）の触知、触察、触学のパワーを引き出し、さらにその体験知に学ぼうとする意欲的な試みであったといえよう。

2007年度のワークショップは視覚障害者のみを対象としていたが、ここで得た経験、“さわる”潜在力を呼び覚ますノウハウは、もちろんユニバーサルなものである。将来的には晴眼者（＝見常者）と触常者の対話の場として本プログラムが成長することを願っている。

たしかに、時代は変わった。僕は「サワッテ ミル カイ」で京大博物館を訪れる度に、20年前に自分自身が同じキャンパスで味わった新鮮な感動を思い出していた。それは1987年、大学入学直後の国史学のゼミで「水平社宣言」を読んだ時の衝撃である。水平社宣言の「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」という文言は、今でも僕が人権、障害者問題を考える上での原点となっている。迫力、格調ともに水平社宣言に比べるべくもないが、ここで僕なりの「触常者宣言」を発表し、多くの見

常者といっしょに時代の変化を喜びたいと思う。この拙い宣言が、「サワッテ ミル カイ」プロジェクトへのささやかなお礼、今後のプログラム発展に向けた応援歌となれば幸いである。

触常者宣言

触常者とは“考える”人である。

視覚は瞬時に大量の情報を入手できるが、その視覚を使えない触常者は、日常生活において種々の不利益を被ってきた。視覚を使えない不自由が差別につながる悲劇も経験した。しかし、触常者は情報の量ではなく質の大切さを知っている。触文化（さわって知る物のおもしろさ、さわらなければわからない事実）の魅力を熟知するのも触常者なのである。たとえば、彫刻作品にゆっくりさわってみよう。触覚の特徴は、手と頭を縦横に動かして、点を線、面、立体へと広げていく創造力にある。じっくり考え、少ない材料から新しい世界を創り出す。見常者たちに“考える”楽しさを教えることができるのが触常者なのだ。

触常者とは“交わる”人である。

日本中世の琵琶法師は文字を媒介としない語りの宇宙に生きていた。彼らは、あたかも源平合戦の歴史絵巻が眼前に展開するかのように、『平家物語』を口から耳へ、耳から口へと語り伝えた。琵琶の音と鍛え抜かれた声。そんな聴覚情報を自由に視覚情報に変換していたのが琵琶法師の芸能だった。また東北地方のイタコ（盲巫女）は、見常者たちが見ることができない死者の霊と交わり、その声を聴いていた。視覚を使わない生業、便利な視覚の束縛から解放された所に五感の豊かな交換、交流の醍醐味があった。視覚優位の現代社会にあって、全身の皮膚感覚を駆使して生活する触常者の経験、“交わる”境地こそが必要とされている。

触常者とは“耕す”人である。

ルイ・ブライユはフランス軍の暗号にヒントを得て点字を考案した。6個の点で仮名、数字、アルファベット、多様な記号を表現できる点字は、触常

者の柔軟な思考力から生まれた触文化の象徴である。触常者は、社会の多数派である見常者が使っている線文字が読めないために苦勞を強いられてきた。だが、逆に見常者は点字を触読することができない。触常者は視覚を使わなくなった代わりに、触覚の潜在能力を開拓し、光に邪魔されることなく点字を読み書きしている。見常者が忘却してしまった広範で深遠な五感の可能性を“耕す”触常者の英知が、人間社会の明日を切り開く。

かつてある社会事業家は『光は闇より』と題する著作の中で、自己の失明体験を素材として宿命感（闇＝過去）から使命感（光＝未来）への転換を主張した。彼は使命感を持って戦中、戦後の日本で愛盲運動を組織し、障害者福祉の指導者となった。また、ある視覚障害者施設の創設者は「盲目は不自由なれど不幸にあらず」と述べ、全盲者として生きてきた人生を客観的に振り返った。彼は視覚障害に起因する読めない、歩けない、働けないなどの不自由の解消をめざし努力を続けた。

では、視覚障害とは使命感を持って克服すべきもの、あるいはさまざまな意味での不自由（マイナス）を抱え込まざるをえない苦境なのか。偉大な先人の業績に敬意を表すると同時に、僕たちは使命感、不自由からの決別を高らかに宣言しよう。じっくり考え、自由に交わり、広く深く耕す。21世紀は触常者の提示する世界観、人間観が積極的に発信できる時代である。今、触常者が育む“考”“交”“耕”のダイナミズムが僕たちの生き方を熱くする。時につるつるとしなやかに、時にざらざらとしたたかに。そんな手ごたえある生命の躍動を求めて！